

## 最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

姉から学んだこと

川崎市立塚越中学校

三年 前田結莉

私は五歳年上の姉がいます。姉は、視覚障害と発達の遅れの二つの障害を抱えながら生活しています。そんな姉が前向きに過ごしていけるのは、姉自身の努力はもちろん、多くの人からの支えもあつたからこそだと日々私は感じています。

姉が抱えている障害は、視力が不安定で眩しさに弱く、距離感や物の形が分かりづらいことがあります。また、発達の遅れの特性として、会話のニュアンスを読み取ることが難しがつたり、急な予定変更に強い不安を感じたりすることもあります。そんな姉と日々を共にする中で、私は、障害を持つ人が安心して生きていくために必要なのは、「制度や支援」だけではなく、「社会の理解と多くの人の支え」だと強く実感するようになりました。

姉は幼い頃に右目の手術をし、右目は光だけが見えている状態で、左目は生まれつき視力が〇・一以下しかなく、眼鏡をかけてもほぼ変わらなかつたため、常に誰かが付き添い、サポートをしなければいけません。

姉は外出をするときに、白杖を持つと「歩きにくい」と言つて白杖を持たず、眼鏡もかけないため、本当は目が見えているのではないかと周りから時々疑われることがあります。視覚障害は「全く見えない」というわけではなく、「一部が見えにくい」「暗さに弱い」「眩しさで物が見えにくくなる」など、人によつて状態が異なります。しかし、そのような現状はあまり知られていません。同様に、発達の遅れのことについても、姉が話の流れについていけなかつたり、言葉の意味をそのまま受け取つてしまつたりすると、「変な子だね」「空気が読めないんだね」といった言葉をかけられことがあります。障害があつても、そう見えないことが多いため、誤解や偏見を持たれることも少なくありません。けれど、そんな中でも姉は、自分なりに工夫をしながら日々を頑張つて生きています。そして、その背景には、多くの人の支えや制度の力があります。姉は障害がある人の社会参加を支援するための活動をする障害福祉サービスの団体で、絵のアーティストとして活動をしています。この活動をする場所では、本人のペースを大切にしながらサポートをしてくれて、姉も安心して過ごすことが出来ています。また、スタッフの方々は姉の特性を理解し、「できないこと」ではなく「できること」に目を向けて接してくれています。しかし、障害がある人への理解は、まだ十分とは言えません。特に、目に見えにくく、誤解されやすい障害については、正しい知識が広

がつていないと感じます。だからこそ、私たち一人ひとりが障害がある人について知ろうとすること、理解しようとすることが大切なのだと思います。特別なことをする必要はありません。困っている人たちに「大丈夫ですか」と声をかける勇気を持つこと。人を見た目で判断しないこと。相手の立場を想像すること。そうした小さな行動が、障害のある人にとって大きな支えになるはずです。

姉の存在は、私にとって学びの連続です。障害があるからといって、不自由な生活を送るわけではなく、周囲からの理解や多くの人からの支援、本人の前向きな気持ちがあるからこそ、自分らしい生き方を見つけることが出来るのだと私は、姉を通して学びました。

私は、障害があるなしに問わらず、全ての人が個性の違いを尊重し合い、支え合いながら共に生きていく、自分らしく生きられる、そんな社会を創る一員になれたらと思っています。